フランシスカン* 霊性におけるエウカリスティア および その現在的重要性

ピエトロ・メッサ（Pietro Messa）

1．語の釈義，および問題の所在

本論稿を，論題に採用したキー・タームの釈義を以て中世の諸問題から始めようと思うが，論題の第一の要素である「エウカリスティア」については，通常の典礼辞典をひもとけば事足りるものであるから，特別の問題提起はしない。

問題なのはむしろ第二の要素，「フランシスカン霊性」の方である。このタームとその射程については，とりわけフランシスカン・大ファミリーの間で，アイデンティティ維持のために，かつまたメンバー養成の観点から，しばしば語られるが，問題は非常に広範囲にまたがるものであるから，論点を明確にした研究がなされなければならない。じっさい，この問題は，「フランシスカン学派」とまで表現されるようになる「フランシスカン思想」の議論につながるのである。これについては，ピエトロ・マラネージが人間論的フランシスカン神学の論文に対して寄せた書評を思い起こせば充分であろう。当該書評において，マラネージは，13世紀に何人もの人間がフランシスカン神学者と定義されたが，語られるべきは〝フランシスカン神学者〞というよりも，むしろ〝神学者であるフランシスカン〞についてである，と指摘している[1]。

---

*訳註　アッシジのフランチェスコの精神およびそれを源とする宗教運動。またそれに携わる人々。

[1] P. MARANESI，書評『J.B. FREYER, *Homo viator: der Mensch im Lichte der Heilsgechichte. Eine theologische Antropologie auf franziskanischer Perspektive*. (Veröffentlichungen der Johannes-Duns-Skotus-Akademie Mönchengladbach, 13), Kevelaer 2001』, *Collectanea franciscana* 73 (2003), 711-717。マラネージは，717ページで，「(〝フランシスカン哲学〞や〝フラ

この意味で，次のような問いがなされるのはもっともなことである。すなわち，いったいいつ，フランシスカン神学やフランシスカン思想といった自覚が——もっといえば，たとえば「ドミニカン学派」に対置される，まさに「フランシスカン学派」という定義が——，生まれたのか。この問いに関連して，以下のことを思い起こすのは適当であろう。説教修道会のメンバー，いわゆるドミニカンは，1286年のパリ総集会では，その取り決めのためにトマス・アクィナスの教義を弁護しなければならなかったが，1301年のサラゴサ総集会ではその教義は会全体の教えの規定と定められるにいたる。さらに1323年，小さき兄弟たちがキリストおよび使徒の貧の問題をめぐって教皇ヨハンネス二十二世と大論争のまっただ中にあった中，トマスは列聖される。このようなことが小さき兄弟たちに起こることはなかった。バニョレジョのボナヴェントゥラが列聖されたのはやっと1482年，シクストゥス四世，すなわちフランシスカンであるロヴェレのフランチェスコの〝身びいき〟によってであるし[2]，ヨハンネス・ドゥンス・スコトゥスにいたっては，彼への崇敬が承認されたのは実に1993年になってのことである。説教修道会士と違い，小さき兄弟会士には特定の権威的思想家に依拠する義務はなく，しかし逆に，ペトルス・ヨハンネス・オリーヴィを学んではならないという禁令があった。この点について，レオナルド・シレオは的確に著している。「フランシスカンの教授たちは，特定の教義を守り伝える証人としてというよりも——ドミニカンがトマスについてするように——，歴史的啓示の発生的価値を守り引き継いでいく証人として振るまった」。「彼らの探求の最

ンシスカン神学〟を語ることができないのと同様），〝フランシスカン人間論〟を語ることはできない。語りうるのはフランシスカンたちの人間論であり，その最初の一人がフランチェスコである」と主張している。同様のことは〝フランシスカン・エウカリスティア霊性〟についても言える。

[2] Stanislao da Campagnola, *Le vicende della canonizzazione di S. Bonaventura*, in *San Bonaventura francescano* (Centro di Studi sulla Spiritualità Medievale. Atti del XIV convegno), Todi 1974, 209-255; A. Vauchez, *Les canonisations de S. Thomas et de S. Bonaventure. Pourquoi deux siècles d'ecart?*, in *1274 année charnière. Mutations et continuités* (Lyon-Paris, 30 septembre-5 ottobre 1974) (Colloque international du Cnrs n. 558), Paris 1977, 753-768

終的な意義は，これと特定し学派として従うべき対象としうる何らかの理論のうちに見出しうるものではない」[3]。

「フランシスカン学派」の神学の議論から「フランシスカン霊性」の議論に戻ろう。エウカリスティアの問題と結びつくとき，ことはより複雑になる。じっさい，幾世紀にもわたってフランシスカニズムの内部では，実にさまざまな伝統が結びつき，決定的な影響，あるいは汚染とすら言いうるものを，ときに‘こうむり’，しかしより多くの場合，みずから望んで示してきた。その結果，たとえば，同じフランシスカンに属するとはいえおのおの異なった起源や成り立ちを持つスピリテュアリ諸グループを一つ名称のうちに押し込むような，極端な単純化の危険がきびしく現前することとなる。これはエウカリスティアの問題においても言えることである。「フランシスカン・エウカリスティア霊性」の輪郭を特定し描かんとする試みは危険をはらんだものであり，慎重な研究，とりわけ方法論の面での注意を必要とする。出発点としては，まず個々の思想家と各時代についての調査を，なおざりにしてはならない。この点については，たとえば，聖パスクアーレ・バイロンが教皇レオ十三世によってエウカリスティア委員会の守護聖人とされた，その手続きについての研究が示唆深い。こうした研究により，教皇の政策を，いわゆる「レオによる合同」と対比しつつ読んでいくことが可能となろう。この合同により，種々さまざまな小さき兄弟グループは，一つの「小さき兄弟会」の型に流し込まれたのである。

また，エウカリスティアの祭儀に関するフランシスカンの取り決めを分析して，当該祭儀がどのように制度化され，どのようにエウカリスティアの重要性の認識を実践レベルに反映させていったかを見ることもできよう。じっさい，ゲルト・メルヴィル教授ひきいる，いわゆる「ドレスデン学派」が強調するように，制度とは，重要であると認知された価値

---

[3] L. SILEO, *I primi maestri francescani di Parigi e di Oxford*, in *Storia della Teologia nel Medioevo*. II. *La grande fioritura*, ed. G. d'Onofrio, Casale Monferrato 1996, 646-647；「13世紀のフランシスカンの教授たち—《学派》？」という示唆深いタイトルを掲げた節は重要である（pp. 645-649）。

を実践可能なものとし，さらにその持続性をも保証する様式である[4]。しかし，これ以上の議論は法学の領域に踏み込むことになろう。我々がとるべきもっとも効果的な手法は，フランシスカンの世界で，いつ，どのように，「フランシスカン・エウカリスティア霊性」について書かれるようになったかを明らかにしていくヒストリオグラフィ〔研究対象を文字史料の中に追いつつ議論の射程や方法論を浮き彫りにしていく歴史叙述〕の手法である。

2.「フランシスカン・エウカリスティア霊性」のヒストリオグラフィ

フランシスカン思想の独自性を明確にしようと思うとき，この学派に帰すべき最も重要な功績のひとつは，エウカリスティアへの献身である。かくして，たとえばサンタントニオのヨハンネスは，その論稿『フランシスカン全文庫 *Bibliotheca universa franciscana*』で，「聖なるエウカリスティアについて」考察したフランシスカンを実に100人以上列挙するのである[5]。

---

4 G. Melville, *"Diversa sunt monasteria et diversa habent institutione". Aspetti delle molteplici forme organizzative dei religiosi nel Medioevo*, in *Chiesa e società in Sicilia. I secoli XII-XVI*. Atti del II Convegno internazionale organizzato dall'arcidiocesi di Catania (25-27 novembre 1993), a cura di G. Zito, Torino 1995, 323-345; Id., *Nuove tendenze della storiografia monastica di area tedesca. Le ricerche di Dresda sulle strutture istituzionali degli ordini religiosi medievali*, in *Dove va la storiografia monastica in Europa? Temi e metodi di ricerca per lo studio della vita monastica regolare in età medievale alle soglie del terzo millennio*. Atti del Convegno internazionale (Brescia-Redengo, 23-25 marzo 2000), Milano 2001, 35-51.

5 Ioannes a S. Antonio, *Bibliotheca universa franciscana*, I, Matriti 1732, Bibliotheca materiarum; III, Matriti 1733, Bibliotheca materiarum; C. Balić, *De Eucharistia tamquam sacramento unitatis ecclesiasticae apud Ioanem Duns Scotum et posteriores theologos franciscanos*, in *XXXV Congresso eucarìstico internacional. La Eucaristia y la paz. Sesiones de estudio*, I, Barcellona 1952, 296 の引用より

ヒストリオグラフィの領域で「フランシスカンとエウカリスティア」について語られるのは，とりわけ1900年代のことである。おさえるべきは，同世紀初頭のカンディド・マリオッティの著作，世紀半ばのレオーネ・ブラカローニやエフラン・ロンプレの諸論稿，そして後半世紀初頭の『フランシスカン霊性ノート』第三号の『フランシスカン霊性におけるエウカリスティア』。すべては第二バチカン公会議以前に著されたものである。公会議後は，リナルド・ファルシーニ監修の『フランシスカン辞典』「エウカリスティア」の項目が追加されることとなる。

2.1. カンディド・マリオッティ　Candido Mariotti：エウカリスティアと，カトリックおよびフランシスカンのアイデンティティ

19世紀から20世紀にかけて，小さき兄弟会の列聖審査総請願者であったカンディド・マリオッティ修道士は，〝フランシスカン特別四信心〃に関する以下の四書を出版した。『イエスの御名とフランシスカン』，『無原罪の御方とフランシスカン』，『イエス・キリストの御受難とフランシスカン』，そして『エウカリスティアとフランシスカン』である[6]。この最後の書物の目的を，著者本人はこう表明している。

> したがって，ますますさかんになりつつあるこのエウカリスティアへの献身と祭儀の促進に，我々もおのが至らなさの中からながら，せめて間接的にでも貢献したいと思い，各時代，各地域におけるフランシスカンのエウカリスティアのための働きについて簡潔に報告するのは，適当かつ有意義なことであると考えるのである。すなわち，かの献身および祭儀が世界中でより一層さかんになり広まるよう信者を沸き立たせようとして，何よりもまず自分自身にとっての義務としたすばらしい模範を以て彼らが何を行いまた教えたか，それを伝えることによって，これに刺激を受けた現在のそして将来のわが兄弟たちが，自らの能力に応じておのおの同じように生きようと努めるようになるように[7]。

---

[6] C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, Fano 1908.
[7] C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, VI-VII.

これは，フランシスカン霊性がエウカリスティアへの献身に寄与するように，かつまた，エウカリスティア霊性という特定の霊性に参与しているのだとの自覚を持つ小さき兄弟会士自身の献身を鼓舞するために，書かれた論稿である。マリオッティは「聖なる父祖フランチェスコ」から始め，聖アントニオ，聖ボナヴェントゥラ，(ヨハンネス・ドゥンス・スコトゥスには触れない)，聖キアラとつづけて，自分と同時代のフランシスカン，たとえばチヴェッツァのマルチェッリーノ神父にまで筆をすすめる。マリオッティのこの著作は，カトリックとして，かつフランシスカンとしての強いアイデンティティを示す本である。エウカリスティア委員会の守護聖人，聖パスクアーレ・バイロンのような主要なエウカリスティア思想の代弁者に光を当てることによって，聖フランチェスコの模範性と自分の時代の霊性との連続性を，確かに浮き彫りにしているのである。

さらに，マリオッティは，護教的論調たからかに論争のまっただ中にとびこみ，バルナバ会士に対抗して，クアラントーレ〔顕示された聖体への 40 時間の信心業〕の実務制度におけるフランシスカンの主導的立場を抗弁した。まさにこの目的で彼は次のように書く。「しかし，聖フランチェスコのこの熱狂的な息子たちは，聖にして効果大なるクアラントーレという制度を，今や自らの使命に役立てていた。単にカトリックの民衆の信心や献身をかきたてるためだけではなく，また異端者，とりわけカルヴァン派やユグノー派の内にまことの信仰心，まことの宗教性を呼び覚ますために」[8]。彼はプロテスタントを「儀礼の唖者，祭儀の不感症者」[9] と呼ぶ。

マリオッティの著作の第七章「エウカリスティアの殉教フランシスカン」は，イギリスの殉教者のみならず，ゴルクム〔ホルケム〕市のフランシスカン修道院の長であった殉教者，ニコロ・ピック神父とその伴侶に，とりわけページを割く。著者は，教皇とエウカリスティアに敵対したことにおいてとりわけ特徴的なカルヴァン派を「新しい異端，狂信者，

[8] C. Mariotti, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 133.
[9] C. Mariotti, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 135.

ならず者」と呼ぶ[10]。その彼らに対抗して，ニコロ・ピック神父は「異端・カルヴァン派の悪しき種がそこら中に根付く」のを防ぐために二つの説教をおこなった。「一つはエウカリスティアの秘蹟にイエス・キリストが現存することについてであり，もう一つはつねにカトリック信仰の告白の内に堅忍するべきことについてであった」[11]。ニコロ神父はその他の人々と共に検挙され，拷問にかけられる。

> しかし，このために責め苦を受ければ受けるほど，彼らはますますゆるぎなく，一体となって，この至聖なる秘蹟，我々の救い主イエス・キリストの，パンと葡萄酒の形のもとのまことの血と体の内に生きることを告白するのであった。であるから，かの極悪なる異端どもが，エウカリスティアにおけるイエス・キリストの現存の教義を単に否定するばかりでなく，これを憎しみをもって見ていたのは明らかなのである[12]。

ニコロとその伴侶の殉教の話を終え，マリオッティは結ぶ。

> そうとも，ヨーロッパが，世界中が，知っている。オランダのカルヴァン派どもはゴルクムの巡礼者に残酷きわまりない死をもたらしただけでは満足せず，彼らが息絶えるや，その不遜で汚らわしい手を以て彼らのまだぴくぴく脈打つ胸を割き，さぐり，ねめ回し，人の体の内部を形づくるあらゆるものを根こそぎにしたのだ！　しかも，まだまだ足りないといわんばかりに，彼ら，オランダのカルヴァン派の牧師たちは，苦悩する人類，四肢をもがれ血塗れになった殉教者の苦しみとともに地獄の嚢からはい出てきた悪魔のように，その醜い体をおびただしい無垢なる血による罪と汚れによって飾ったのだ[13]。

---

[10] C. Mariotti, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 139.
[11] C. Mariotti, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 141-142.
[12] C. Mariotti, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 147.
[13] C. Mariotti, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 150.

マリオッティは，殉教は，たとえば1597年の日本の例のように他にもすでにあったことに触れるが，しかし今や責め苦を与えているのはキリスト教徒である。彼らは，上のすべてのことを「福音を広めるという名目のもとに」[14]おこないつつ，「イエス・キリストの霊的花嫁，聖にして無垢なるカトリック教会に対する憎しみ」[15]をあらわにするのである。

エウカリスティアの殉教者が巻き込まれたイギリスでの出来事に話をすすめて，マリオッティは言う。「16世紀の，ドイツにとってのルター，スイス，オランダ，およびフランスの一部地域にとってのカルヴァンは，イギリスにとっては国王ヘンリー八世であった。[…]有害なるこの三人の天才は，その数知れぬ追随者とともに何と多くのことをしでかし，霊的にもこの世的にもおのが祖国を害したことか！」[16]。つづけて，「ヘンリー八世は傲慢とリビドーの怪物である」と定義し，また王位を引き継いだエリザベスは「傲慢にしてリビドーたっぷりのかのヘンリーとアン・ブーリンに似つかわしい娘」[17]。フランシスカン，ジョン・フォレストとその伴侶の殉教を語った後，マリオッティは皮肉な調子でむすぶ。「もはやおわかりであろう，当時の英国人にとっても，これは教皇庁の野蛮と暴政に立ち向かう福音の文明にして愛徳だった。今やついに彼らは解放されたのだ！」[18]。ニコロ・ピックにおこったように，ここでも，福音の名のもとにキリスト教徒が他のキリスト教徒に殺された。彼らを引き裂いたものは，「エウカリスティアの内のイエス・キリストの現存」に対する異なった信仰であった[19]。

マリオッティはかく宣言してエウカリスティアの殉教者にあてた章を結ぶ。

見よ，あのいまわしい〔宗教〕改革が我々フランシスカンにももた

---

14 C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 151.
15 C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 150.
16 C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 153.
17 C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 155.
18 C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 155.
19 C. MARIOTTI, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 155.

らした文明と進歩の有益なる果実を，我々は今もくり返しているのである。かの改革は，今日われわれの時代にあっても相変わらず正当化され，それどころか称えられ，さらにはわがイタリアではカトリックに羨望をもたらしすらして，ついには人心をまどわし堕とすのである[20]。

2.2. レオーネ・ブラカローニ Leone Bracaloni：ユダヤ人と異端プロテスタントの間のエウカリスティア

レオーネ・ブラカローニは，芸術の観点からフランシスカン・エウカリスティア霊性に関心を向ける。フランチェスコの書き物から研究を始め，「教会の定めにしたがって」[21] エウカリスティアを管理するよう兄弟たちをうながす『すべての長上への手紙』に言及して，こう書く。

「教会の定め」というのは，おそらく第四ラテラノ公会議決議録の第二十章を意図しているのだろう。この章は，「忌まわしくもおぞましいことをしでかす無思慮な手がこれに触れることのないよう，すべての教会において聖油とエウカリスティアが鍵のかかるしっかりした保管ケースにしまわれなければならない」ととりきめている。つまり，当時心配され，不幸にも時折ユダヤ人や異端のために起こったことが，起こらないようにと[22]。

ブラカローニ神父は‘何年か前，1919 年に，アゴスティーノ・ジェメッリ神父がアッシジのサン・ダミアーノで 15 日間の黙想会をおこなった’と 1928 年に書いているが，このジェメッリ神父というのは，つねにブラカローニと密な関係にあり，つまりは，ユダヤ人へのその敵対的態度が

20　C. Mariotti, ofm, *L'Eucaristia e i Francescani*, 156.

21　アッシジのフランチェスコ，「長上への手紙」，(『アシジの聖フランシスコの小品集』庄司篤訳，聖母の騎士社，1988 年，p.67)：「また，主のいと聖なる御体が極めて粗末に置かれているならば，聖職者は，公教会の定めに従って貴い所に移し，錠をかけておくべきです」。

22　L. Bracaloni, *Saggio di archeologia e di arte Francescana Eucaristica*, in *Studi francescani* 25 (1928), 452.

非難される人であった。これについては，ラポーニが書いている。「ジェメッリの反セム主義は，しかしながら，幾世紀にも渡ってユダヤ人にキリスト殺しの民を見てきた宗教的反セム主義と位置づけられるものであり，したがって人種差別主義と特に呼ぶものとは，流れを異にする」[23]。‘ユダヤ人がエウカリスティアに対してしでかすであろう忌まわしくもおぞましいこと’に関するレオーネ・ブラカローニの言説も，この宗教的反セム主義の表れである。これを利用して，1938年，ファシスト政権は反ユダヤ人種法を公布した。これに関連して次のものを考察するのは適当なことであろう。『我々は忘れない。ショアーの一省察』──「ユダヤ教との宗教関係委員会」によって起草され，1998年，かのヨハネ・パウロ二世の手紙を序に付して公布された文書である[24]。

> 人類の一致と全人種・全民衆の等しき尊厳についての，教会の確固たる教えに相反する理屈にもとづく反セム主義と，我々が反ユダヤ主義と呼ぶところの感情──残念なことながらキリスト教徒もその責めを負う，幾世紀にもわたって続く疑いと敵意の感情──との違いを軽視してはならない[25]。

レオーネ・ブラカローニの主張，アゴスティーノ・ジェメッリの態度，人種法はみな同時代のものであり，公会議後の今は，ユダヤ人をエウカリスティアへの冒瀆に結びつけるこのような考えはもはや容認し得るものではない。

フランスやイギリスの殉教者にも当然ふれつつ，ブラカローニはつづける。「少なからぬフランシスカンが，神聖なる秘蹟への信仰をあかしす

---

[23] N. RAPONI, *Gemelli Agostino*, in *Dizionario Bibliografico degli Italiani*, 53, Roma 1999, 31-32.

[24] COMMISSIONE PER I RAPPORTI RELIGIOSI CON L'EBRAISMO, *Noi ricordiamo: una riflessione sulla Shoa*, in *Enchiridion Vaticanum,* 17, 522-550.

[25] COMMISSIONE PER I RAPPORTI RELIGIOSI CON L'EBRAISMO, *Noi ricordiamo: una riflessione sulla Shoa* in *Enchiridion Vaticanum,* 536.

るために異端プロテスタントの前でおのが血をも流した」[26]。さらに論を進め，とある教会的・霊的雰囲気を描いた芸術作品にコメントする。

> とりわけ意義深いのが，ジョヴァンニ・バッティスタ・ガウリ，通称バチッチョ（1709年没）の構図である。無原罪のおとめをもって高みに「栄光」を描き，その方向へ顕示台と聖体をかかげる聖キアラ，一方，下方にはおぞましい悪魔風の怪物が打ちのめされて延びている。聖母と聖人への崇敬，および至聖なる秘蹟の賛美を否認するという比類なき大胆さのためにたたかれる異端ルター派を表しているのであるが，これらの崇敬は，この高度に護教的な絵が示すように，フランシスカンによって力強くあかしされたのであった[27]。

ブラカローニは，あらためてプロテスタンティズムに言及し，これを冒瀆のヒドラと呼んで，論を終える。

2.3. エフラン・ロンプレ　Efrem Longpré：エウカリスティアと神秘主義

1900年代半ば，エフラン・ロンプレ神父は，フランシスカン霊性におけるエウカリスティアの神秘主義的側面に注目した。彼は，カンディド・マリオッティが多くのページを割いて先にすでにやったように，基準としてボナヴェントゥラをとりあげるが，ヨハンネス・ドゥンス・スコトゥスにも言及する。

ロンプレは，ブレトンを代表とする，自分と同時代の何人かの神学者の提言から論をはじめる。彼らいわく，「神秘主義経験の問題におけるエウカリスティアの機能をはっきりさせるのが妥当かつ有益であろう」[28]。

---

26 L. Bracaloni, *Saggio di archeologia e di arte Francescana Eucaristica*, 461.

27 L. Bracaloni, *Saggio di archeologia e di arte Francescana Eucaristica*, 468-469.

28 E. Longpré, ofm, *L'Eucharistie et l'union mystique selon la spiritualité franciscaine*, in *Revue d'ascétique et de mystique* 25 (1949), 307。同頁で以下を引用。V.-M. Breton, *La vie de prière. Sa nécessité, sa pratique, sa*

この確認からはじめて，彼はおのが研究の目的を明らかにする。

> この試論では，三位一体の神の経験的理解へみちびく主要な道，その第一の段階に聖なるエウカリスティアをくみこむことを神学者に促したと考えられるフランシスカン学派の主要なテキストに言及するにとどめる。また，イエスの十字架に集約される聖フランチェスコの修道会の神秘神学は決して特異なものではなく，ギリシャ教父の秘蹟の神秘主義を，本質としてよく守るものだということも明らかになるだろう[29]。

根本的にボナヴェントゥラの思想に代表される「聖フランチェスコの修道会の神秘神学」をあつかったこの論稿の最後で，ロンプレは主張する。

> であるから，フランシスカン学派の気持ちとして，エウカリスティアが神秘体験の重要な秘蹟であることは確かである。神への魂の遍歴は，この世をへて御父へとみちびく恍惚の道のすべてを表しつくすわけではない。ラ・ヴェルナ山のセラフィムの六枚の翼に象徴される六つの道に加えて，もう一つの秘蹟的次元があり，それがキリストの経験的理解へと導く。これがエウカリスティアである。キリストの御体についての説教は，神への魂の遍歴を，教会の初期神秘主義の方向で補完し，完成させるものである[30]。

数年後，ロンプレは，バルセロナで開かれた国際エウカリスティア学会に参加し，次の発表をおこなった。『フランシスカン学派における神秘的体の秘蹟，エウカリスティア』。ここで彼は，エウカリスティアは，贖

grandeur, Paris 1946, 180.

[29] E. LONGPRÉ, *L'Eucharistie et l'union mystique selon la spiritualité franciscaine*, 307-308.

[30] E. LONGPRÉ, *L'Eucharistie et l'union mystique selon la spiritualité franciscaine*, 333.

罪の供犠としてのキリストの受難の記憶であるのみならず，また交わりの秘蹟でもあると強調する[31]。この提言の射程は，これが第二バチカン公会議前の時代のものであり，エウカリスティアを奉るにあたって犠牲の側面が交わりの側面を圧して強調されがちであった――つねにそうと言いきれるものでもないが――ことを考えるとき，はっきりする。この公会議とともに，より正しくいえば公会議の解釈のとある流れのもとに，逆のことがおこる，つまり，犠牲の側面を圧して交わりの側面が，ある意味，絶対視されるようになるのである。犠牲的側面は，たとえば2004年，メル・ギブソンの『パッション』によって，賛否両論をまきおこしつつふたたび取り上げられた。

ロンプレは，総括として，次のように提言する。

> かくして，聖アウグスティヌスに忠実で教父の象徴的神学に非常に敏感なこのフランシスカン学派は，伝えられてきた価値のほんのささやか点をも見誤ることなく，エウカリスティアと教会，しるしと現実の間の，本質的にして直接的なつながりを提唱することに成功した。彼らは，エウカリスティアの象徴性にもとづく根本教理の重要な側面を守ったのである[32]。

ヨハンネス・ドゥンス・スコトゥスにとってミサは〝教会の供犠――教会というのは，ここでは「神秘体」「キリストすべて」を意味する――〟であり，したがって祭司は「教会の人間として」[33]ふるまうのであるということを述べた後，ロンプレは結論する。

---

31 E. LONGPRÉ, *L'Eucharistie, sacrement du corps mystique selon l'école franciscaine*, in *XXXV Congresso eucarìstico internacional*, 287-288.

32 E. LONGPRÉ, *L'Eucharistie, sacrement du corps mystique selon l'école franciscaine*, 289.

33 Cfr. C. BALIĆ, *De Eucharistia tamquam sacramento unitatis ecclesiasticae apud Ioanem Duns Scotum*, 293-302；もっとも，この論稿の終わりで著者は言う。「フランシスカンによって示された教会の一致の秘蹟は，フランシスカン固有の教義にではなく，伝統の共有財産に属するものであろう」。

したがって，エウカリスティアは，何よりもまず，教会の一致および神秘体の，秘蹟かつ絶対原理である。フランシスカン学派は，聖ボナヴェントゥラとともに，エウカリスティアの象徴性をもっとも生き生きと理解した。現代のスコティストの作品においては，かの聖なる秘蹟は，受肉からその目的までの一連の神の救済計画の第一の段階，キリストの内の全構造の隅石として表れる。イエス・キリストについて，聖パウロはコロサイの信徒への手紙第一章一七節でこう書いている。「彼〔御子〕はすべてのものよりも先にあり，すべてのものは彼〔御子〕の内にある」。見てのとおり，これは，近代のスコトゥス学派が，受肉した御言葉に絶対的なプライオリティをおくがゆえに，エウカリスティアについてもまた宣言するところのものである[34]。

教父，とりわけギリシャ教父の教義との連続性と，エウカリスティアと教会の結びつきについての提言は，神秘的合一のプランに強い重要性をおきつつ，ロンプレの思想の根本構想となっていた。

2.4.『フランシスカン霊性ノート *Quaderni di Spiritualità francescana*』：公会議の始まりに

1962年，フランシスカニズムの問題をあつかう研究者グループの寄稿よりなる『フランシスカン霊性ノート』（フェルディナンド・アントネッリ監修）の第三号が，「フランシスカン霊性におけるエウカリスティア」に当てられた。この収録論文を一本一本吟味するのは有益なことである。

2.4.1. ヴァレンティノ・ナタリーニ Valentino Natalini：エウカリスティアとフランシスカン神学思想

ナタリーニは，フランシスカン神学者を考察する研究者たちの論稿を分析して言う。「聖ボナヴェントゥラの次は，ヨハンネス・ドゥンス・スコトゥスを挙げよう。彼は，確かにフランシスカン神学のもっとも偉大

---

[34] E Longpré, *L'Eucharistie, sacrement du corps mystique selon l'école franciscaine*, 292.

な代弁者である。彼の後，スコトゥス学派はこのセラフィム的修道会の学派と同一視されるようになるのである」[35]。さらに，さまざまなテキストを例示して言う。「ざっと報告しただけからもわかるように，フランシスカンの教授たち，とりわけボナヴェントゥラは，教父伝統の諸要素を精力的に整理し，熟考し，表現した。われわれのキリストへの一致は心の内奥から現実的に描かれ，かくしてエウカリスティアは，まさしく神秘経験に到達するための大いなる秘蹟の道として提示されることなる。[…]みてのとおり，フランシスカン学派の教授たち，とりわけ聖ボナヴェントゥラが，いかにエウカリスティアを，神秘体の一致のうちにその多数多様なる四肢を内的にも外的にも堅固にする秘蹟として提示してきたか，わかるというものである」[36]。

2.4.2. ヴィットリオ・バッタィオーリ　Vittorio Battaglioli：エウカリスティアとフランシスカン的信心

フランシスカンのエウカリスティアへの愛のあかしを紹介すべく，バッタィオーリはエウカリスティアのために死んだフランシスカンの殉教事件に着目する。「プロテスタントの〔現存の教義の〕否認に対するカトリックの答えは，フランシスカニズムの新しい活力のうちに具体的で情熱的な表現を見いだした。聖体，すなわちキリストの身体の象徴ではなく現実――愛の単なる追憶ではなく現存――の祭儀は，聖フランチェスコの子供たちの情熱的なキリスト中心主義のうちに，その「あかし」と「擁護」を見いださずにはいなかったのである」[37]。「異端たちを前にしてまことの現存を告白しつづけたがために殉教した，オランダはゴルクムのフランシスカンたち」[38]が，まさにその例である。

---

[35] V. Natalini, *Il Mistero eucaristico nel pensiero teologico francescano*, in *L'Eucarestia nella Spiritualitā francescana*, Assisi 1962 (Quaderni di Spiritualitā francescana, 3), 53.

[36] V. Natalini, *Il Mistero eucaristico nel pensiero teologico francescano*, 70.

[37] V. Battaglioli, *L'Eucarestia nella pietā francescana*, in *L'Eucarestia nella Spiritualitā francescana*, 88-89.

[38] V. Battaglioli, *L'Eucarestia nella pietā francescana*, 89.

バッタィオーリは，かく議論を締めくくる。

> 以上述べたことから約言するに，偉大なフランシスカンたちにとってエウカリスティア的態度は人生に本質的なものであり，その信心を形づくり特徴づけるものであった。賛美された聖体，一見「無化」であるそれは，セラフィム的聖者の息子たちの内に，キリストの苦しみと死への「同情」をいや増させた。食べられることを旨とする聖体は，貧の渇望のうちの真実・唯一・具体的なる所有へと，そして謙遜なる怖れのうちの待望へと，彼らをかりたてる。彼らは，「キリストの謙遜の秘儀」のすべてを，したがって「観想」と「和合」を具体的に融合する可能性を，聖体のうちにつねに再発見するのである。聖体は彼らにとって，つね変わることなく，「歓び」の源にして「賛美」と「あかし」の終着点なのである[39]。

2.4.3. イジーノ・コンチェッティ Igino Concetti：フランシスカン諸聖人のエウカリスティア的あかし

イジーノ・コンチェッティが列挙するあかしのリストに，マリオッティがすでにその論稿で長々と語ったゴルクム殉教者によるそれは欠かせない。「プロテスタンティズムの異端的で敵意に満ちた運動」の犠牲者たちは，「キリストの無垢なる花嫁，聖なるローマ・カトリック・使徒的教会を守る」ために，「異端者たち」[40] に殺された。同様に聖パスクアーレ・バイロンも「異端者たちが彼ら修道者に向ける嘲笑・愚弄」に立ち向かわなければならなかった。このオルレアンでの尋問のように。「教皇権擁護者よ ── と，異端たちは，獅子が咆吼し襲いかかるように彼に問うた ──，おまえは，おまえたちが奉りミサと呼ぶところの秘蹟の内に神がおわすと信じているのか？」[41]。迫害の内にあかしされたこの信仰こそが，

---

[39] V. BATTAGLIOLI, *L'Eucarestia nella pietà francescana*, 91-92. かぎ括弧は原文による。

[40] I. CONCETTI, *Testimonianze eucaristiche di alcuni Santi francescani*, in *L'Eucarestia nella Spiritualità francescana*, 101.

[41] I. CONCETTI, *Testimonianze eucaristiche di alcuni Santi francescani*, 106.

1897 年，教皇レオ十三世をして彼をエウカリスティア委員会の守護聖人と宣言させたのであった。

コンチェッティは論を結ぶ。

> エウカリスティアは愛の秘蹟である。キリストは愛ゆえに人々の真ん中に秘蹟として現存しつづける。この愛のもと，フランシスカンは，修道会と教会のもっとも輝かしいページの中でもうっとりするほどに美しい歴史のページをしたためてきた。
> アッシジのキアラ，ゴルクムの殉教者たち，パスクアーレ・バイロン，セッツェのカルロは，エウカリスティアのあかしとしてその絢爛，光輝を称えるべく，幾星霜もの軌跡の上にそびえ広がる星空の，そのもっともまばゆい星たちにすぎない。その光は，これと競い生きんとする逃れがたい情熱を，すべての人のうちに燃え立たせるのである[42]。

気づいてのとおり，ゴルクム殉教者の迫害者に言及するトーンは，相変わらずこれを異端と呼びはするものの，マリオッティの書き様にくらべるとずっと和らいでいる。今やエウカリスティアは，何よりも「愛の秘蹟」となったのである。

2.4.4. ボナヴェントゥラ・マリアッチ　Bonaventura Mariacci：エウカリスティアとフランシスカンの説教

数ある例の中からマリアッチは，ヤン・フスの追随者，つまりカリスからの聖体拝領をも望んでいたフス派に抗する，カペストラーノのヨハンネスの説教をとりあげる。「カペストラーノのヨハンネスはすぐさまこの運動の危険を察知した。この運動は，教会の権威をゆるがす一方，西洋に安定していたエウカリスティアの祭儀をも危険にさらしていた。彼は全力をもってこれと闘った」[43]。

マリアッチによれば，フランシスカンの説教は，「エウカリスティアの

---

[42] I. Concetti, *Testimonianze eucaristiche di alcuni Santi francescani*, 112.

[43] B. Mariacci, *Il contributo della predicazione francescana al culto eucaristico*, in *L'Eucarestia nella Spiritualità francescana*, 120.

祭儀の擁護と伸展に飛躍的に貢献し，また，エウカリスティアなるイエスとこれを必要とする心とのコンタクトを容易にする有効な手段として教会が公式に認めた祭儀のいくつかの形式を明察し先取りした」[44]。

2.4.5. リナルド・ファルシーニ Rinaldo Falsini：フランシスコ会のエウカリスティアの祈り

方法論的にしっかりと基礎づけられていない場合，フランシスカン・エウカリスティア霊性というものを探求しようとする試みがいかに見当違いなものになるか，リナルド・ファルシーニの論稿の結論がまさに示している。彼は，単に時代的にばかりではなくかけ離れた祈り，つまりアッシジのフランチェスコの『遺言』にある「Adoramus te」と，ボナヴェントゥラ，ヨハンネス・ペッカム，パスクアーレ・バイロン，カミッラ・バッティスタ・ヴァラーノらのその他の祈りを検討した後，次のように結ぶ。

> 作者やそのインスピレーションの源は異なれど，ここに集めたエウカリスティアの祈りはまったく一律のライン上にある。簡素な言葉づかい，正しい神学思想，その表明に深く根ざしながら抑制の利いた献身。そのエウカリスティアへの賛美は，また，常にあがない主なるいけにえとの関係を保っている。かの秘蹟に献身した偉大な魂により口述されたこれらの祈りのうちに，フランシスカンは，エウカリスティアの信心をより正しく，より健全なものにする動機づけと方法を見いだすのである。
> では，私的な，また公的な献身のために，これらの祈りをどれか役立てようではないか。とりわけ，純粋で単純な神学思想を温かな形に表したヨハンネス・ペッカムの祈りを。
> 健全なフランシスカンの伝統によりきっぱり入り込み，我々のエウカリスティアの信心をより正しいものにする，最上の手段であろ

44　B. MARIACCI, *Il contributo della predicazione francescana al culto eucaristico*, 132.

う[45]。

2.4.6. ブルーノ・コロサク　Bruno Korosak：フランシスカン・エウカリスティア霊性に関する補助文献

本誌の最後の論稿で，小さき兄弟，ブルーノ・コロサクは次のように書いている。「フランシスカン霊性の再生が始まって50年以上たったにもかかわらず，その主唱者や立役者は，エウカリスティアの秘儀をめぐる思弁的および実践的なフランシスカン思想について，いまだに称賛に値する論考を表していない」[46]。すでに予備研究はなされているのだから，このような研究は特別に困難なものではないと明言した上で，彼はフランシスカン・エウカリスティア霊性に関するさまざまな出版物を検討し，次の三つのセクションに分類する。「フランシスカン・エウカリスティア神学」，「フランシスカン・エウカリスティア崇敬」，「エウカリスティアとフランシスカン修徳」。各々のセクションでいくつかの著作をあげているが，その中に上述のカンディド・マリオッティ神父とエフラン・ロンプレ神父の著作がある。

> フランシスカン・エウカリスティア神学は，同じレール上を動いているにもかかわらず，固有で特徴的ないくつかの教義上の濃淡を示している。たとえば，聖ボナヴェントゥラは，エウカリスティアの形色の秘蹟的役割に際だったアクセントをおいており，そしてこの役割というのは，形色が人の使用のためにあり人の食べ物であることに，つまり〔エウカリスティアが〕霊的糧のしるしであるために不可欠な条件に，かかわっている。[…]他方，福者ヨハンネス・ドゥンス・スコトゥスの教説は，実体変化における〔イエスの〕エウカリスティア的現存についての内的ことわりに重きをおいた。[…]さらに，フランシスカン神学にとって，またそのエウカリスティア霊

[45] R. Falsini, *Preghiere eucaristiche francescane*, in *L'Eucarestia nella Spiritualità francescana*, 143.

[46] B. Korosak, *Sussidi bibliografici intorno alla Spiritualità eucaristica francescana*, in *L'Eucarestia nella Spiritualità francescana*, 144.

> 性の正しい評価のために，もっとも重要なのは，17 世紀のスコティストの教説であろう。彼らは，至聖なる三位一体，受肉，エウカリスティア，教会といった，我々の信仰の主要な教義について，これらの間の密接な結びつきを最初に見抜いたのである[47]。

コロサクの，「フランシスカン霊性の再生が始まって 50 年以上たったにもかかわらず，その主唱者や立役者は，エウカリスティアの秘儀をめぐる思弁的および実践的なフランシスカン思想について，いまだに称賛に値する論考を表していない」という提言から，いくつかの所見が引き出されよう。

まず第一に，コロサクが指摘したような研究を完成させる必要を誰も感じていなかったことに注意しなければならない。じっさい，エフラン・ロンプレ神父は，フラシスカンのためにではなく，1952 年のバルセロナの「第 35 回国際エウカリスティア大会」や『修徳神秘雑誌 Revue d'Ascétique et de mystique』のために論稿を表したのであり，また，カンディド・マリオッティ神父は，エウカリスティアの祭儀と献身の普及のためにフランシスカンが果たした活動成果を宣伝するために，その研究を行ったのであった。

第二に強調すべきは，1962 年にはフランシスカン固有の霊性生活を再発見する必要が感じられていたことであり，かくして『フランシスカン霊性ノート』双書が実現して，その第三号がエウカリスティアに捧げられた。しかしながら，1962 年に提言された，「エウカリスティアの秘儀をめぐる思弁的および実践的なフランシスカン思想についての称賛に値する論考」を表す必要は，目立っては認知されなかった。それは，時代を考えれば驚くべきものではない。このとき，まさに第二バチカン公会議が始まろうとしていたのであり，フランシスコ会とフランシスカン・ファミリーは，公会議が望むように，創設者のカリスマを再発見 ── これは『修道生活の刷新・適応に関する教令 Perfectae caritatis』に規定されている ── することによって自分たちを刷新するべく，反省作業に全エネルギーを傾けなければならなかったのである。じっさい，この教令をと

---

47 B. KOROSAK, *Sussidi bibliografici*, 144-145.

おして，第二バチカン公会議は修道生活の刷新を促した。その掘り下げのための基本原則を挙げつつ，公会議は，「創設者自身の精神と目的」をくみ取り従うことによって「キリスト教生活のあらゆる形式の源泉と諸制度の原始の精神に立ち返ること」[48]の重要性を強調する。創設者のカリスマに戻れとの促しにより，所定の修道会や宗教団体の基礎を，つまりまさにその歴史を，よりよく知らんとする大きなエネルギーが，歴史的，霊的，神学的，制度的研究にそそがれることとなった。

この試みはすべての修道会諸機関により成されたが，独特なのは小さき兄弟会，いや，フランシスカン運動――というのは，アッシジのフランチェスコのカリスマに直接結びついた一連のすべての修道会，僧院，グループを意味するのだが――のケースである[49]。じっさい，歴史の中でしばしばおこる一連の偶然の一致により，フランシスカン運動における創立者のカリスマの回復は，歴史研究――とりわけ19世紀の終わりから，ポール・サバティエとともに，アッシジの聖者関連の史料にずっと注意ぶかい新しいアプローチに息を吹き込んだそれ――と，結びついたとは言わないまでも，互いに助け合うことになった[50]。歴史研究と，創立

---

[48] *Perfectae caritatis*, 1,1, in *Enchiridion Vaticanum*, 1, 703. この点は，下記の書ですでに詳述している。P. MESSA, *Le* Ammonizioni *di Francesco d'Assisi tra ritorno alle origini e tradizione*, in P. MESSA-L. PROFILI, *Il Cantico della fraternità. Le Ammonizioni di frate Francesco d'Assisi*, Assisi 2003, pp. 5-23.

[49] これに関しては，cfr. G. BUFFON, *I francescani si confrontano con la propria storia: ricerca storica e trasformazione istituzionale*, in *Antonianum* 77 (2002), 557-573; ID., *Ricerca storica e trasformazione istituzionale. Spunti di riflessione relativi all'Ordine francescano*, in *Claretianum* 43 (2003), 47-70.

[50] Cfr. *San Francesco nella ricerca storica degli ultimi ottanta anni*. Atti del IX Convegno del Centro di studi sulla spiritualità medievale (Todi, 13-16 ottobre 1968), Todi 1971; *La "questione francescana" dal Sabatier ad oggi*. Atti del I Convegno internazionale della società internazionale di studi francescani (Assisi, 18-20 ottobre 1973), Assisi 1974; *Gli studi francescani dal dopoguerra ad oggi*. Atti del Convegno di studi (Firenze, 5-7 novembre 1990), a cura di F. Santi, Spoleto 1993 (Quaderni di cultura mediolatina. Collana della "Fondazione Ezio Franceschini", 2); *Frate*

者のカリスマに戻れとの公会議の規定を実行しようとする願いが出会い，相互に豊かにしあったのである。

この出会いに象徴的なのが，カエタン・エッサーが果たした役割である。彼は豊かな研究活動のかたわら，フランシスカンのグループや修道会への補助活動を熱心に行い，公会議の刷新への招きを具体化する手助けをした[51]。

むろん，エッサーの貢献は，とりわけアッシジのフランチェスコの書き物の編纂にある。しかし，彼はまた，一連の解説を現実のものとすることによって，書き物のさらなる理解にも貢献したのである。

エッサーの著作に並んで，フランシスコ会とその制度の刷新に貢献するべくアッシジの聖者のカリスマを再生しようとしたテオフィル・デボネ，タデ・マトゥラらの著作が挙げられよう。この研究は，批判的な目で見れば，しばしばフランチェスコと初期の兄弟会像にかたよりすぎ，それ以後のすべての歴史は真にフランシスカン的なものではないとして，拒絶はしないまでも忘れているということを認めなければならないにしても，非常に価値の高いものであった。テオフィル・デボネの著作，『直

Francesco d'Assisi. Atti del XXI Convegno internazionale (Assisi, 14-16 ottobre 1993), Spoleto 1994 (Atti dei Convegni della Società internazionale di studi francescani. Nuova serie, 4); *Editori di Quaracchi 100 anni dopo. Bilanci e prospettive*. Atti del Colloquio Internazionale. Roma 29-30 maggio 1995. Scuola Superiore di Studi Medievali e Francescani. Pontificio Ateneo Antonianum. A cura di A. Cacciotti e B. Faes de Mottoni, Roma 1997 (Medioevo, 3). この問題に関して，19世紀から20世紀におけるアッシジの聖者の記憶の形成と伝播を明らかにした，サンドラ・ミリオーレの論考は興味深い。**さらに重要なのは，**この現象がいかに20世紀のヒストリオグラフィに影響したかに注意をはらうことである。cfr. SANDRA MIGLIORE, *Mistica povertà. Riscritture francescane tra Otto e Novecento*, Roma 2001 (Bibliotheca Searaphico-Capuccina, 64).

51 エッサーの業績および公会議後のフランシスカンの再発見については，cfr. *Verba Domini mei. Gli* Opuscula *di Francesco d'Assisi a 25 anni dalla edizione di Kajetan Esser, ofm*. Atti del Convegno intenazionale (Roma, 10-12 aprile 2002), a cura di A. Cacciotti, Roma 2003 (Medioevo, 6), とりわけ，Johannes B. Freyer, Leonhard Lehmann, Cesare Vaiani, Grado Giovanni Merlo. 諸氏の論稿。

観から制度へ』[52] に，このアプローチのおそらくもっとも雄弁な一表現が見いだされよう。

かつて，ローマの聖エジディオ共同体の創設者であるアンドレア・リッカルディは言った。「公会議後の教会社会の大部分が，タームの字義どおりの意味での原理主義，つまり原理の絶対化を犯している」。これは，もっぱら使徒言行録に書かれた使徒教会の生活様式にのみ関わろうとして，それ以後の発展，とりわけコンスタンティヌス以降の発展を，当時の教会をコンスタンティヌス教会と呼んで拒絶した人たちに関して言われている。これが一般的にも言えるものであるならば，この言葉はある意味，源泉の精神を取り戻そうとするあまり，しばしば原理を絶対化したフランシスカニズムのためにも，用いることができよう。

この絶対化は，ある意味，「フランシスカン・エウカリスティア霊性」に関してもおこったのである。この問題に関して，アッシジのフランチェスコとエウカリスティアについての研究は数多くあれど，それ以後の歴史については研究されていない。一方，先に強調したように，フランチェスコ以後の「フランシスカン・エウカリスティア霊性」に関する研究は，実際には互いに非常に距離のある事柄や書き物を同一レベルに見る危険をおかしているのである。

2.5.『フランシスカン辞典』 公会議の新しい風潮の表れ

第二バチカン公会議以後，創設者のカリスマ研究が主流になり，アッシジのフランチェスコについての研究が中心になったとはいえ，フランシスカン霊性のグローバルなビジョンを現実のものとしようとする試みが費えることはなかった。かくして，『フランシスコ会第二会の書き物における霊性のテーマ』という著作集が編纂される。編者のキアラ・アウグスタ・ライナーティは，エウカリスティアについて次のように書いている。「エウカリスティアが，信仰を以てかのお方を拝領する者を変えるよう定められた愛の賜物であるという理解 ── じっさい，かのお方は，拝領者をご自身の内に生かし，同化するべく，自らをお与えになるので

[52] T. DESBONNETS, *Dalla intuizione alla istituzione* (Paris, 1983), Milano 1986 (Presenza di san Francesco, 33).

あるが——は，第二会の文書において生彩を放っている」[53]。しかし，かく明言された意図にもかかわらず，結局，ライナーティによって編集されたものは，エウカリスティアについて語り，第二会すなわちクララ会会員によって書かれたという事実にのみ共通点を持つ文書を，ただ並べたものにすぎなかった[54]。

1980年に出版され，1983年にいくつかの項目を加えて再版された『フランシスカン辞典』がとった立場は違った。この辞典は，1977年に出版された『フランシスカン史料集 Fonti Francescane』のように，それ自体，公会議後のフランシスコ会の刷新されたヒストリオグラフィの表れであり，それはリナルド・ファルシーニによる「エウカリスティア」の項目にも見て取れる。じっさい，彼は最初からエウカリスティアを「フランチェスコに固有であり，しかしまた教父のそれや今日の第二バチカン公会議の提題とも一致したヴィジョンを尊重するために，一貫した有機的なフレームの中で」[55] 考えるつもりだと主張している。この前置きから，序文で既に次のように表された結論を理解するのは難しいことではない。「詳細に吟味した結果，フランシスカン霊性経験におけるエウカリスティアの中心性や真正のカトリック教義との適合性ばかりでなく，信仰についての直観と展望の独自性と現代的意義が明らかになった」[56]。フランシスカンのヴィジョンの独自性と現代的意義は，ファルシーニが特に明らかにしようとするところのものである。じっさい，フランチェスコが「〝主の御体をみること〞について幾度となく語るのは，もっぱら信仰のヴィジョンについて言っているのであり，信心者ぶろうとする風潮にひきずられているのではない」[57]。「彼のバランス感覚と内面性」は際

---

[53] C.A. LAINATI, ed., *Temi spirituali dagli Scritti del secondo ordine francescano*, Assisi 1970 (Antologie del pensiero spirituale francescano dirette da fr. C. Cecci-fr. S. Maiarelli, 2/II), 1081.

[54] Cfr. たとえば，C.A. LAINATI, ed., *Temi spirituali dagli Scritti del secondo ordine francescano*, 1080-1131.

[55] R. FALSINI, *Eucaristia*, in *Dizionario francescano. Spiritualità,* Padova 1983, 519.

[56] R. FALSINI, *Eucaristia*, 519.

[57] R. FALSINI, *Eucaristia*, 528.

だっており，一方，「キアラは，エウカリスティアの信心の面においても，確かに師父フランチェスコの真正なる解釈者にして忠実な模倣者であった」[58]。これは，アッシジの聖女の経験をセラフィム的師父のそれに照らして理解するという，すでによく見られるようになっていたヒストリオグラフィ的立場である。項目の第二の点にすすんで，ファルシーニは「フランシスカンの伝統」と「フランシスカン神学」を描き出し，「フランシスカン学派の偉大な教師聖ボナヴェントゥラは［…］，また，教父，とくにアウグスティヌスの系統において，エウカリスティアと教会の結びつきを守った最後の偉大な神学者である」[59]とする。

フランシスコ会史における重要人物をあげながら，マリオッティの著作においては多数のページが割かれ，コンチェッティの著作でも度合いは低いながらもあげられていたゴルクムの殉教者たちには，まったく触れられていない。カペストラーノの聖ヨハンネスは，確かに異端審問官で説教者であったが，フス派と対立したのではなく，「部分的に誤った動機により，つまりパンの形色のみにもキリストが現存するということを否定するがゆえに，カリスでの拝領を要求する両形色主義者に対立したのである」[60]。〝異端プロテスタント〟にはもはや言及されず，フス派の立場はある部分においてのみ誤りであるとされ，ただ「南フランスのカルヴァン派による迫害」を被った聖パスクアーレ・バイロンに言及されるのみである。ファルシーニは，エキュメニカルな次元を考慮し促進しようとした第二バチカン公会議の路線に，完全に従っている。たとえば，1962年に，おとめマリアに関する最初の草稿『幸いなる御方について De beata』の第七草案で承認された修正には，「〝信仰離反者〟という項目を除き，〝分かれた兄弟〟と記述すべきである」[61]とある。この変更は，他の

---

[58] R. FALSINI, *Eucaristia*, 538.
[59] R. FALSINI, *Eucaristia*, 542.
[60] R. FALSINI, *Eucaristia*, 543.
[61] 第一草稿『*De beata*』第七草案の『*Emendationes*』は以下に公刊された。Cfr. *Acta et Documenta Concilio Oecumenico Vaticano II apparando*. Series II (*Praeparatoria*), volumen IV (*Acta Subcommissionum Commissionis Centralis Praeparatoriae*), Pars III-2 (*Subcommissio de schematibus emendandis*), Typis Vaticanis 1995, 228-231；主要な点は次の作品に取り

同種のものと同様，エキュメニカルな精神の扶けとなるように行われたものであり，フランシスカンとエウカリスティアに関わるそれを含む，公会議後のヒストリオグラフィに大きな影響を与えることになる。

第二バチカン公会議のエウカリスティア神学をまとめた後，聖フランチェスコにささげた結論でファルシーニは次のように書いている。

> エウカリスティアの多様な側面についての，この正しくバランスのとれた信仰ヴィジョンは，聖フランチェスコのもっとも貴重な遺産であろう。歴史の変転とともに何らかの不均衡を被ってきたとはいえ，フランシスカン霊性に特徴的な一側面と見なしうるような逸脱や歪みはみられない。したがって訂正や純化の必要はない。もっぱら，カトリック教会の真正な教義につねに忠実であったフランチェスコに従って，第二バチカン公会議により提唱された新しい見通しと統合に向けて開かれていく必要があるのみである[62]。

第二バチカン公会議は，保持すべきものとそうでないもの，現代的意義を示すために語られるべき要素と，逆に混乱をもたらすと考えられたがゆえに放棄されるべき側面とを規定した。ひもとかれるべき文献としてマリオッティがあがらず，ロンプレや『フランシスカン霊性ノート』第三号の諸論考があがるのは驚くべきことではないのである。

3．今日のフランシスカン・エウカリスティア霊性

ヨハネ・パウロ二世は，2005年をエウカリスティアにささげた年にすることを望んだが，それは研究活動を，霊性のさまざまな形をも考慮に入れつつ，この秘蹟の尊さを深化する方向へと押し進めた。これに関し

上げられている。Cfr. E. M. Toniolo, *La Beata Maria Vergine nel Concilio Vaticano II. Cronistoria del capitolo VIII della Costituzione dogmatica* “Lumen gentium” *e sinossi di tutte le redazioni*, Roma 2004, 87-88, nota 85.

62 R. Falsini, *Eucaristia*, 547.

てフランシスカンも無関心ではなく，この機会に出版された諸研究もその表れであった。じっさい，エウカリスティア年のために，エウカリスティアそのものについてのフランシスカンの貢献を見いだす必要性が出てきたのである。しかし，問いがあるからといって，容易に答えを見つけうるというものでは，必ずしもない。なぜなら，その問いはまた間違ってたてられたものでありえ，したがって正されるべきであるかもしれないからである。

現在，われわれは，『フランシスカン霊性ノート』第三号の著者たちと同様，「フランシスカン霊性におけるエウカリスティア」のテーマに関する議論を前にしているが，しかし一つ違いがある。彼らは，第二バチカン公会議が始まる数ヶ月前に意見を交換しあったが，われわれは，公会議の結論の四十年後に答えを見つけなければならない。すでに強調したように，二十年以上前に編まれた『フランシスカン辞典』の項目「エウカリスティア」は，もはや日付の入ったもの，第二バチカン公会議後という限定した時代のヒストリオグラフィの表れである。

このことを念頭において，たとえば，1962 年の『フランシスカン霊性ノート』所収の論考が今も有効であるかを問うのは妥当なことである。回答は，肯定でも否定でもありえない。一面においては有効である。なぜなら，それらはフランシスカンによって，あるいはフランシスカンを登場人物として，書かれた一連のエウカリスティア関連のテキストだからである。一面においては有効ではない。というのは，種々の作品に関する研究が進んで，したがって，たとえばより信頼しうるテキストを収録した批判的エディションが完成しているから，というばかりではない。困難はまた，教会史へのアプローチが変わったという事実にもある。この変化は，エキュメニズム――このために，今日，たとえば教会史よりも，より一般的なキリスト教史がむしろ語られるのであるが――の影響ばかりではなく，2000 年 3 月 12 日の，教皇ヨハネ・パウロ二世による，キリスト教徒の過ちのための謝罪[63]にも由来する，つまりは，他宗教への

---

[63] Cfr. COMMISSIONE TEOLOGICA INTERNAZIONALE, *Memoria e riconciliazione. La chiesa e le colpe del passato*, in *Enchiridion Vaticanum*, 18, 2310-2406，この第四章《4. Giudizio storico e giudizio teologico》は，ま

新しいアプローチのため〔に，教会史へのアプローチも変わったの〕である。こうして，1962年には，〝異端〟により殺された殉教者ピックとその伴侶について語られたが，今日，この〝異端〟は，〔カトリックと〕協働関係にある宗教改革派キリスト教徒と見なされる。彼らとともに，義認についての議論に関する文書が作成されるにいたり，彼らとともに，エキュメニカルな深い相互理解が得られようとしているのである。この歴史の見直しは，ますます急務になっている。ヨーロッパが一致しても，そこに住むキリスト教徒は分裂しており（ヨーロッパのキリスト教的根源への呼びかけがくり返されるにもかかわらず），しかし，イエスは人々の回心をキリスト教徒の一致との相互関係のうちにとらえたのであるから。「父よ，あなたがわたしの内にあり，わたしがあなたの内にあるように，彼らもまたわれわれの内に一つのものとしてください。世が，あなたがわたしを遣わしたと，信じるようになるように」[64]。

確かに，エウカリスティアは，このエウカリスティア年に出された種々の文書に対する批判が示すとおり，今日なおキリスト教徒の一致にとって問題となっている。とりわけ回勅『エウカリスティアの教会 Ecclesia de eucharistia』および教書『あがないの秘蹟 Redemptionis sacramentum』に対する批判ゆえに，至聖なるエウカリスティアに関するいくつかの点に関して，聖体賛美式をする者への全免償――2005年1月14日に，内赦院の教令『奇跡のうち最大のもの Miraculorum maximum』により認められたもの――について語らないよう，監視したり，禁止したりしなければならないでいる。かくして，たとえばリガルは，教皇回勅への最初のアプローチで，論考を「革新的諸要素」と「トリエント公会議への回帰」の二つに分け，ヨハネ・パウロ二世の文書のエキュメニズムの展望を後者に位置づけている[65]。さらに，この回勅が批判を受けた点を挙げながら明言する。「特に，いけにえと司祭職に関する面の強

さに歴史研究に当てられたものである。

64 ヨハネによる福音書第17章21節.

65 Cfr. J. RIGAL, *Une première approche de l'encyclique de Jean-Paul II《L'Eglise vit de l'Eucharistie》*, in *Nouvelle Revue Théologique* 125 (2003).

調と，そのエキュメニカルな意味での逆行が認められる」[66]。すでに2000年の聖年に，とりわけ教理省の文書『ドミヌス・イエズス』によって，浮上していた問題が，ふたたび表れているのである。

このような分裂のあり方を前にして，「聖フランチェスコは〔人々を〕一つにし，エウカリスティアは引き裂く」ということが明らかになった。まさにキリスト教徒，ユダヤ教徒，イスラム教徒の間の対話において，次のことがおこるように。「聖フランチェスコはアッシジで一つにし，イエスはエルサレムで引き裂く」。

驚くべきことではない。エウカリスティアは初めからキリスト教のアイデンティティを明言する秘蹟であり，またある意味，「守りの」秘蹟であった。じっさい，古代においてすでに，キリスト教徒は主日，すなわちエウカリスティアの日なしには生きられないと主張しつつ，自らのアイデンティティを明言していた。

中世において，アッシジのキアラは，イスラム軍の攻撃を前にして，エウカリスティアの入った聖櫃をあたかも堡塁のように自分の前にかかげ，共同体を守った。この行為には強まりゆくエウカリスティアへの献身が表れている。その献身は，概して教会の敵――ときにユダヤ人，ときにギベリン党，ときに異端，ときにイスラム教徒と同一視された「信仰破壊者」――との戦いにおいて顕現したエウカリスティアの奇跡により燃えたつものであった[67]。こうした背景にキアラは強く影響を受けて

---

[66] J. RIGAL, *Sull'eucaristia. L'ultima enciclica di Giovanni Paolo II*, 871.

[67] A. BENVENUTI PAPI, 《In castro poenitentiae》. *Santità e società femminile nell'Italia medievale*, Roma 1990 (Italia sacra. Studi e documenti di storia ecclesiastica, 45), 149-155. 事態を区別せず何もかも同一レベルに見るこの傾向と，その帰結として *Processo di Canonizzazione* に見られるキリスト教徒の敵の混同について，修道女フィリッパは次のように証言している。「アッシジの戦いのとき，タタール人やサラセン人，その他神と聖なる教会の敵どもが引き起こすであろうことを，修道女たちがたいへん怖れていたので，幸いなるマザー〔キアラ〕は彼女たちを勇気づけ始めた」; in *Santa Chiara di Assisi. I primi documenti ufficiali: Lettera di annunzio della sua morte, Processo e Bolla di Canonizzazione*. Introduzione, testo, note, traduzione italiana dei testi latini e indici a cura di P. Giovanni Boccali, ofm., Santa Maria degli Angeli 2003 (Pubblicazioni della Biblioteca

おり，守りの機能を持つこのようなエウカリスティアの宗教性の支持者となった。こうした宗教性は，ボルセーナの奇跡，および，教皇ウルバヌス四世の崇敬を受けるべく聖体布をオルヴィエトまで運んだ行進にその表れの頂点を見る[68]。

エウカリスティアについてのおのが信条を，おのがアイデンティティの礎として表明することにおいて，エキュメニカルな批判がカトリック教会に対してなされるとき，どのようにふるまうべきであろうか。分裂のきっかけとなるエウカリスティアを放棄し，すべてのキリスト教徒がその内に生きる御言葉にこれを置き換えるべきであろうか。これは，キリスト教徒一致祈願週間の締めくくりとして毎年1月25日にサン・パウロ・フオーリ・レ・ムーラ大聖堂で執り行われる祭儀が採る道である。さまざまなキリスト教教派の代表者が招かれるこの祭儀は，1999年まではエウカリスティアの祭儀をその要としていたが，聖年2000年1月18日，同聖堂の「聖年の扉」がエキュメニズムのために開かれたときから，御言葉の典礼あるいは晩課の唱詠が好まれるようになった。

もう一つの道は，エウカリスティアが「障害物」とならないようにする道であろう。反宗教改革の壮麗なバロック様式の聖櫃からより簡素で近代的な「聖体入れ」へと変え，あるいは祭壇を小さな聖体拝領台とし，あるいは，「御体と御血になりますように」という聖別の言葉を「私たちの間におられますように」というより無害な言葉で置き換えることにより，まことの現存の強調を和らげることによって。このような解決は，当然，ある者を満足させある者を不快にして分裂の原因となった[69]。ま

Francescana Chiesa Nuova-Assisi, 10), 117.

68　P. Messa-A. Maiarelli, *Le fonti liturgiche degli scritti di Chiara d'Assisi e il* Breviarium sanctae Clarae, in *Clara claris praeclara. L'esperienza cristiana e la memoria di Chiara d'Assisi in occasione del 750° anniversario della morte.* Atti del Convegno Internazionale (Assisi, 20-22 novembre 2003), in *Convivium Assisiense* 6/1 (2004), 112.

69　第二バチカン公会議の典礼改革が，ルフェーヴルの離教において決して二義的な問題でなかったことを想起するのは重要である。Cfr. N. Buonasorte, *Tra Roma e Lefebvre. Il tradizionalismo cattolico italiano e il Concilio Vaticano II*, prefazione di R. Morozzo della Rocca, Roma 2003 (Religione e società. Storia della chiesa e dei movimenti cattolici, 44).

た，上に引いた文書のようにカトリックの教義を改めて表明するとき，論争が再燃して抗議の意思表示がなされることになるという事実を考慮に入れなければならない。ヨーロッパのキリスト教の根源についてかくも語られている。にもかかわらず，ヨーロッパはある意味で一致しているのに，ヨーロッパのキリスト教徒は分裂しているのである。とりわけエウカリスティアのために。

このような状況を前にして，本論考の論題の「フランシスカン・エウカリスティア霊性」に戻るとき，ピックとその伴侶の殉教の話について問いが生じる。ありえない話だとして，歴史からとは言わないまでも，記憶から削除するべきであろうか。歴史を否定しないため，また同時にエキュメニカルな歩みを妨げないために，どのような態度をとるべきなのだろうか。より一般的な言葉でいえば，それは，エウカリスティアによって表されるアイデンティティと対話の関係の問題である。

4．アッシジ精神において。ヨハネ・パウロ二世とともにエウカリスティアから対話へ

二十世紀の後半数十年のフランシスカニズム史の主役は，というよりも主役の一人は，疑いもなく，とある非フランシスカン，つまりヨハネ・パウロ二世である。彼は，じっさい，1986 年 10 月 27 日という一日を以て「アッシジ精神」と呼ばれるものを始めた[70]。この一日は，ペルージアはサクロ・クオーレ修道院の礼拝堂で，クララ会士を始めとする教区の観想修道女たちとともに，ヨハネ・パウロ二世の司式するエウカリスティア〔のミサ〕をもって始まった。この祭儀は，「アッシジ街頭の祈りの熱烈なる瞬間，まさにペルージア訪問の締めくくりの瞬間」と定義される[71]。だから，1986 年 10 月 27 日という歴史的な一日は，教皇の「聖なる

[70] C. BONIZZI, *L'Icona di Assisi nel magistero di Giovanni Paolo II*, Assisi 2002.

[71] *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, IX,2 (1986, luglio-dicembre), Città del Vaticano 1986, 1247.

エウカリスティアを祝うことでこの一日を始めたかった」[72]というはっきりした意向により，エウカリスティアとともに始まったのである。「アッシジの祈りの集いが，和解，正義，平和の豊かな実りをもたらすよう，また人類を救う祈りの必要性ついて心善き人々への呼びかけとなるよう，また地上のすべての宗教者による友愛の証となるよう，主にこい願うために」[73]，観想修道女たちを招いたエウカリスティアだった。ヨハネ・パウロ二世は次のように述べて短い説教を締めくくった。「このすべての願いをともに主の祭壇にささげましょう。神のあわれみをこいねがい，聖なるいけにえの祭儀を準備しながら」[74]。エウカリスティアの聖なるいけにえの中には，ヨハネ・パウロ二世にとっての「アッシジ精神」の原点がある。たしかに，エウカリスティアは，プロテスタントに対する頑とした返答を視覚的にもあらわした美しいバロックの聖櫃が示すように，強いアイデンティティと同義である。しかしヨハネ・パウロ二世は，1986年10月27日，エウカリスティアから，平和のための祈り，断食，巡礼の宗教間対話の一日へと歩みを進めた。アイデンティティから対話へ。アッシジのフランチェスコが，エウカリスティア／馬槽からスルタンとの会見へと歩みを進め，スルタンもまたそれに応えたように。フランチェスコにとって，アイデンティティと対話を共に担うのは容易なことではなく，必ずしも成功したわけではない。同様に，ヨハネ・パウロ二世にとっても容易なことではなかったが，しかし，これが，「アッシジ精神」を遺産として残した彼が，我々に示す道である。ここにおいて，フランシスカンは，多くの小さき兄弟が殉教にいたるまでに生きたアイデンティティの秘蹟，エウカリスティアを対話に開きつつ，かつまた対話からエウカリスティアを生きつつ，本当に教会に貢献することができるのである。

---

72 GIOVANNI PAOLO II, *Alle claustrali durante la Messa prima della partenza per Assisi*, in *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, IX,2, 1247.

73 GIOVANNI PAOLO II, *Alle claustrali durante la Messa prima della partenza per Assisi*, in *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, IX,2, 1247.

74 GIOVANNI PAOLO II, *Alle claustrali durante la Messa prima della partenza per Assisi*, in *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, IX,2, 1248.

三邊マリ子，伊能哲大　共訳

付記：翻訳は，2005年4月22日，教皇庁立Antonianum大学（ローマ）において開催されたEucaristia, vita spirituale e francescanesimoにおける発表原稿による。